
そんなのありますか？

高遠 陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そんなのありますか？

【Nコード】

N3261BA

【作者名】

高遠 陽

【あらすじ】

いきなり腕を掴まれて「好み」だなんて、誰が信じるっていのかな。

それでも私の好みを知り尽くしたように攻めてくる彼に翻弄されて……。

いきなりですか

1.

翌日に休日控え、浮かれて騒ぐ空気が充満している金曜日の夜。気のおけない友人 伊藤 千紘ちひろとわたしこと八重野 環花子わかこが気を抜けない話でけん制をしながら盛り上がって飲んでいた居酒屋の暖簾をくぐって外の出たその瞬間、いきなり手を掴まれた。

目の前には、なぜかスーツのグレーのヘンリボーン。

呆然として顔を上げると、そのスーツの持主は照れた笑いを私に向けつつ、名刺を一枚差し出した。

『居酒屋チエーン 山木屋 統括本部長 山木 漣』

今出てきたばかりの居酒屋の名前が書かれた名刺だった。

まじまじと名刺を見て、そのままその名刺を持っている手を見ると、意外と線の細い、労働なんて知らないと言っているような手があった。

「好みなんです」

その細い手とは裏腹に、低く重みのある声が頭の上から降ってきた。

驚いた。

本当に驚いた。

居酒屋の一番忙しい時間帯には相応しくないスーツ姿で、そして軟そうな（と言っては失礼なんだろうけれど）、擦れていない表情かおを柔らかそうな長めの前髪で隠すように私をじっと見下ろしていた。

「え……つと？」

「店にいるときからすごく好みの子がいるなって思ったんだけど、全然目線が合わないから追いかけてきてしまいました」

「環花子。先、帰るね」

私の横でくすくす笑いながら千紘が私の肩にぽんと手を置いた。

「えええっ！？ちょっと待ってよ、千紘！」

「たまにはナンパされなさいよ」

「いやっ！？これってぜったい千紘の間違いでしょ！！」

確かによく二人で飲んでいるとナンパはされてきたけれど、それは大抵千紘が受けることで私ではない。

特出しているところは168cmの身長くらいという平平凡凡な私とは違い、千紘は女の私から見てもかなりの美人だ。

豊かな栗色の髪はうねって背中まで届いているし、大きなヘーゼルの瞳が黒い淵に覆われてそれは魅惑的。鼻筋も通って横顔はまるで絵に描いたみたいで、唇は今キスをし終わったみたいにぷっくり膨れて魅惑的に輝いている。身長は160cmにちょっと届かないけれどいてるところは出ていて引っ込んでいてところは引っ込んでいてという、羨ましい限りの体型だ。

そんな千紘と一緒にいれば大抵ナンパにあってしまうので、この男も店から出て行く私たちにあわてて、間違えて私の手を掴んだに過ぎないに決まってる。

「いえ、私はあなたが好みなんです」

決して細くはない二の腕を掴んだまま、恥ずかしげもなくそんな言葉をいう。

「環花子を見染めるなんて、久しぶりに人を見る目のある人だわ
ー。ここは安心して私は帰るね」

「ちよつとおおおつ！逃げるなっ！」

「山木 漣さん？あまりうちの子、いじめないでね。……名前割
れてんだし」

「善処しますが」

「ふふ。よろしく。じゃあ、また月曜にねー」

「千紘おっ！？」

千紘を捕まえようとじたばたとしても、腕は男に掴まれたままで
動きようがなく、みるみる千紘は闇に隠れて見えなくなっていく。
とうとう角を曲がって私の視界から消えると同時に、もう一度く
るんと身体の向きを変えさせられた。

「わかこ、さん？名前、あってますよね」

「いやいやいや。違いますからっ！」

「でも彼女はそう呼んでいましたよ？」

ええ、そりゃあもちろん、本名ですからねっ。

けれどもその男は私の単純な嘘なんてお見通しだった。

「どういった字を書かれるのか、興味ありますね」

「……どうして私がそれをあなたに教えると？」

「だって、私はあなたと付き合いたいと願ってるので、そのくら
いの情報を頂いてもいいと思いますよ」

その時携帯のバイブが肩にかけていた鞆から振動してきた。

「ごめんなさい」と一言断って、あわてて携帯を探って電話に出
ると、相手は千紘からだった。

『やほー。うまくいってる?』

「何よそれっ。いくわけないでしょ」

『ふふ。あのね、その人の身元、インターネットで検索したらちやんと写真付きで確認とれたからね。安心してナンパされなさいよー?』

ツーツーツー

千紘……。恐ろしい子っ。

切れた電話をまじまじと見ていると、件の男が目の前に立ちあがって私の手首を捕まえて、スタスタと断りもなしに歩き始めた。

「あっ……。あのっ!手を離してください」

「金曜の夜ですよ?人ごみにまぎれて見失うのも嫌ですから、手をつないでいたほうがよいでしょう?」

「ここには歩いている人なんて私たちくらいですっ!」

「あー。まあ、そんな感じですけどね」

どんな感じだ、どんな。

どこか行きたいところでもあるのか、迷うことなく歩く様は、きりりとして格好いいなんて思ってしまったけれど。

……。やっぱり少し展開についていけません。

いきなりですか(後書き)

紅茶ですか

2.

「わかこさんは、もうお酒を結構飲んでるから、お茶にしましうね」

「誰もあなたとお茶に行くなんて言ってます」

「このあたりに紅茶専門店があるんですよ？知っていました？」

紅茶専門店？

どうして私が紅茶が好きだってことを知ってるの？

軽く眉間にしわが寄るのがわかったけれど、それを止める手立てもなく。

そんな私を見下ろして、ふふふと得意げに笑うこの男の笑顔がちよつとだけ可愛かった。

いやいや、可愛いなんて思っちゃ駄目でしょ。

ここは逃げる方向でっ！

「どうして知っているのかって？……簡単ですよ。珍しいチューハイを注文していたでしょう？だからです」

ああ、なるほど。

確かに居酒屋で『紅茶チューハイ』なるものを頼んだ記憶がよみがえってきた。

紅茶好きには冒瀆的なそれは、それでも試しに一度は飲んでおこうと興味本位で頼んだお酒だった。

……二度とは頼まないと思うけれども。

「珍しいからオーダーしても、本当の紅茶好きの人には受けがよ

くないんです。一口飲んで嫌な顔されるんですよ。紅茶シロップを混ぜただけの、予想通りの味だって。わかこさんはまさにその通りの顔をしてたんです」

本当に私を見ていたんだなあって、妙な関心と得体のしれない不安が襲ってきた。

この人、どこまで私を見ていた（もしくは観察）んだろう。

「だから、紅茶がよほど好きなんだなって思ったんですよ」

ふんわりと柔らかい頬笑みを私に向けて、その人は迷いもなく歩いていく。

言われる通り、確かに私は紅茶が好き。

紅茶葉専門店にも欲しい茶葉のためなら入荷日を確認して買いに行くほどには。

だから夜の八時という時間帯に店が開いているとは思えないけれど、それでも専門店という言葉聞いて試したくなったのはもう病気の範囲かもしれない。

「ほら、あそこですよ」

白く綺麗な指の先には、蔦で覆われた英国調の店構えの、青銅でできた看板がほのかな明かりに照らされて開店していることをうかがわせた。

店の扉をあけると、重厚な木と暗い色合いの壁紙、そしてところどころに照らされた照明がまるで英国のパブ（喫茶室ではなく）の開店前の静かな空間に紛れ込んだかのような錯覚に陥った。

「よい雰囲気のお店でしょう？」

「……はい。とても……落ち着きますね」

閉店間際なのは見て取れたけれど、その男はなじみの客のようで、マスターにお願いするようにコクリと頷いてから奥まった席まで私を連れて行った。

そして椅子を引いて私を座らせると、そのままマスターのもとに言って何やら話しこんでいる。

その間、店内の装飾をゆっくりと見回して雰囲気を楽しんでいると、両手にケーキを乗せた皿を持った彼が帰ってきた。

「好きだといいんですけど」

出されたケーキはタルトタタンとシフォンケーキ。

この男^{ひと}ってば、どこまで私の好みがわかつているのだろうかと思いたくなるくらいつぼをついてきた。

「紅茶、選びましょうか」

「そうですね。……いえ、選んでいただけます?」

「えっ? 私が選ぶんですか? このお店は種類も本当に豊富ですから、わかこさんが気に入っている茶葉もありますよ?」

「だからです。もしあなたが私の好きな茶葉を当てたら……」

「当てたら?」

「私のこと、教えてもいいですよ」

あんまりにも私のことを知り尽くしているような錯覚に陥ったものだから、ちょっといたずら心など、起こしてみた。

わかるわけなんて絶対ない。

居酒屋で私を見ていたくらいじゃ、当てれるわけなんてないはず。

挑戦的にならないように気をつけながら彼のほうを見てみると、長い前髪に微妙に隠された目が、じっと何か言いたげに私を見てた。

名前ですか

3.

「さすがにそれはわかりませんよ。何か手掛かりを頂かないと」

とさつと背もたれに身体を預けて、その男は困ったように呟いた。
でもね、困らしてるんですよ、私としたら。

正解なんて、してほしくない。

けれどなぜか正解するんじゃないかって恐れてもいる。
そのくらいこの男に脅威を抱いているのかもしれない。

思い立ったことを口から言ったおかげで切り返しがうまくできなくて黙っていると、助け船を出すようにその男はこう言った。

「じゃあ、必ずこのメニューの中から選んでください。そして、紅茶限定でお願いします」

そうして差し出されたメニュー表には、紅茶のほかに烏龍茶や緑茶のフレーバードティまであって、合計百種類くらいはあるんじゃないだろうか。

たしかにこれなら『紅茶限定』って言われるのもわかる。

「ところでわかこさん。さっきから名前を呼んでくれないんですが、名刺、ちゃんと見ていただきましたよね」

「ええ。拝見しました」

「じゃあ名前を呼んでいただけますよね」

「いえ、それとこれとは違うんじゃないですか？」

「私のほうとしてはこれから一生わかこさんと生きて行きますの

で、氏よりも名で呼んでほしいのですが」

「いやいやいやいや、いつの間にそんな話に?!」

「ん? 今ですよ。ちゃんと『漣』と呼んでくださいね」

呼べるかっての!

どうして有無を言わずここまで連れてこられているのに……まあ、紅茶専門店でつられてるわけでもないけども……そのナンパ男の名前何て呼ばないといけないのかな?

「嫌です」

「そんな即答しなくても」

「いやここは即答で! それになんで一生なんですか?」

「それは私とわかこさんがこの後よろしくなって結婚するからでしょう?」

よろしくなって……ってなんでなるのかな? なるわけないしっ! その上結婚話なんてしてんじゃないわよ。

無邪気ににこにこほ笑んでる目の前の男をどうやったらやりこめることができるのか。

腹の中がぐつぐつ煮えたぎってくるほどの怒りが湧いてきた。

見た目がいい男なのは見とけるけれど、だからってこの暴挙はいったいなんだ?

優しそうな顔をして、やってることがえげつなくないですかーっ?

「どれにするか決めました?」

「……なんか、私が言ったこととちよつと趣旨が違ってなくないですか?」

「そうですか? あっていますよ。私が選んだのとわかこさんが選んだのが合えば、あなたは私にいろんなことを教えてくれるのでし

よう？楽しみです」

なんか違うくないですかっ！？

下手にこれ以上突っ込むと、また言葉尻をとられて自分の都合のいいほうに持って行かれそうなので、ここは口をぎゅっとつぐんでメニュー表を目で追った。

あー、ほんとうにいろんな種類があるなあ。

ストレートが好きな私はあまりフレーバードティを好まない。

茶葉に付けられた臭いが強すぎて、紅茶の素の味が無くなっているように思うからだ。

一度海外の茶葉専門店の紅茶を缶で購入したことがあるけれど、あまりに匂いがきつくて飲んでいるうちにふらふらしたことがある。もちろん例外もある。

アールグレイはフレーバードティの中でも大好きなもので、よくアイスにして飲んでいるし、ホットでもストレートに飲む後にミルクを入れて味をマイルドにする定番も好き。

けれど今はその大好きなアールグレイよりも目を引く茶葉を見つけてしまった。

珍しいその茶葉は、時期があって、今はそのときじゃない。

それが表記されているということとはよほど仕入れをきっちりしているんだろうなって感心してしまった。

うん。この紅茶にしよう。

オーダーする紅茶を決めたものの、まだまだメニューには飲んだことのないお茶や見たことのない組み合わせのお茶もあって、メニューを見ているだけで紅茶を楽しんでいるような気分になって嬉しくなってきた。

それにさっとメニューを見流して紅茶を決めただなんて、思われたくもなかったし。

少しは知恵を働かしたつもりで、時間をおいてメニュー表を閉じた。

「決めました」

「はい。そのようですね」

相変わらずにここにこと笑っている彼に、気持ちだけでメニュー表をぶつけた。

なんでそんなに余裕があるのか、まったくもって理解できない。

長女ですか

4.

焦げ茶色の革表紙のメニュー表をぱたんと勢い良く閉じて、その男は嬉しそうに微笑んでいた。

「さて、どうやって答えを合わしますか？」

「お互い、このナプキンに答えを書くというのはどうですか？」

そういつてテーブルサイドにあるスタンドからナプキンを二枚取り出すと、一枚を自分に、もう一枚を彼の前に差し出した。

鞆からペンケースを取り出して、ボールペンも添えた。

「わかこさんって、長女ですか？」

「え？……えーっと、それはゲームの賞品対象物件なので、お答えできません」

「それは残念です」

答え合わせの前から何を言い出すんだと思ったら、それは単純に私の鞆が重たそうだからという理由だったそうだ。

一概には言えないのだろうけれど、長子は鞆の中になんでも詰め込むそうで、私が鞆からペンケースを出したことや鞆の容量からみて私が長女じゃないかと思ったみたい。

正解ですけど。

やっぱりこの人、見るところが人とは違うような気がする。

「じゃあ答えを書きましょうか」

「私から」と言ってボールペンに手を伸ばすと、私に見ないように指示をしてからカリカリと文字をひっかく音が聞こえてきた。その音に迷いがない。

「わかこさん、どうぞ」

すいと差し出されたボールペンに、ほのかに温もりが感じられた。……そんなこと今まで思ったこともないのに。

微妙に意識しているんだなと自分に苦笑しながら、やっぱり私も書いているところを見ないようにとくぎをさしてからナフキンに答えを書いた。

「じゃあ『せーの』で」

「はい」

「「せーの」」

『s a k u r a』

『s a k u r a』

テーブルの真ん中にとんと置かれた二枚のナフキンには、予想通り同じ茶葉の名前が記されていた。

『s a k u r a』の名の通り、それは桜の葉をたっぷり使って作られた、桜の香りがやわらかい春の紅茶。

以前勤めていた会社の近所の紅茶専門店ですべて出会ったときは、これほどまろやかな紅茶に出会ったことはないと思ったものだ。

「……どうしてわかりました？」

やっぱりわかってしまうのかと思いつつ、それでも驚きを隠せず彼を見ると、逆に自分が当てたことに至極驚いたように引き気味

になったかと思うと両方のナフキンを見比べてほっとしたように息を吐いていた。

「まぐれですよ」

「うそ」

「うそじゃないですよ。……そうですね、強いて言えば口元、かな」

口元?!

どうして口元で私の好みがばれたというの?

視線を固定するとわかってしまうかもしれないと思って、お茶を決めてからもメニューをあちこち見ていたのに。

「まず視線でだいたいわかりますよね。上下左右、どちらのメニュー表をみているかとかは。けれど何回か目線が固定されたときに、一回だけ、口の端が少し持ち上がったんですよ。それをみて、お気に入りがあったんだって思ったんです。違いましたか?」

うわあ、信じられない。

この人の観察眼っていうのがあり得ないと思う。

「あとは……ずるいと思うんですが、先にケーキを持ってきましたからね」

「ケーキ?」

「そう、ケーキ。これって重要ポイントだと思うんです。タルトタタンとシフォンケーキ。目線のところにあった茶葉で、このどちらかのケーキに合いそうなのを選びました。sakuraなら、まろやかですからシフォンケーキに合いますし。逆にタルトタタンならアールグレイかなって思っていました。ただ、その目線の先にはアールグレイはありませんから」

別に得意げに披露するわけでもなく、自分が感じたとおりの事実を淡々と話しているだけだとわかる。

正直、引く。

ちよつとしたしぐさで何もかも見透かされるんじゃないかという不安が付きまとうけれど。

けれど、面白い。

面白すぎる。

「面白い、ですね」

だから素直にそう言ったら、彼はきょんとして「そんな風に言われたことはないです」とわかるかわからないか程度の小声でつぶやいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3261ba/>

そんなのありますか？

2012年1月11日15時49分発行